

「男女共同参画の“今”。第2回は、前号に引き続き、男性が多く活躍している横須賀市消防局で中央消防署・北消防署長浦出張所に勤務されている方々にお話を伺いました。

女性の採用について、横須賀市消防局総務課で話を伺いました。

Q. 女性の消防士はいつごろから採用されていますか？

A. 1995年度（平成7年度）からです。

Q. 全消防士における女性の割合は？（平成23年11月現在）

A. 2%です（全消防士477人中、女性は11人）

Q. 消防士になるには？

A. 市の消防職員採用試験に合格し、消防学校での初任教育を終了すると消防士としての職務に就きます。

年度別女性採用人数

年度	採用人数	年度	採用人数
平成7年度	2名	平成16年度	1名
平成9年度	1名	平成18年度	1名
平成10年度	1名	平成21年度	1名
平成11年度	1名	平成22年度	2名
平成14年度	2名	平成23年度	1名

消防学校での訓練とは？

●腹筋・背筋・懸垂・腕立て伏せなど

●消防ホースを担いだままのランニングや土のう搬送

●垂直に垂れているロープを登ったり、水平に張られているロープを渡ったり…

▶これらの訓練を男性隊員とほぼ同じメニューで実施するのですが、途中で脱落した女性隊員はいなかったそうです。



『ニューウェーブ』31号に引き続き、男性が多く活躍している横須賀市の女性消防士の方々にお話を伺いました。

次に、米が浜通の中央消防署へ向かいました。
(取材時女性消防士が所属していた消防署)

女性消防士の方にインタビュー

中央消防署 (現在は消防局予防課)
臼井 優美さん

Q. お仕事はいつから？

A. 2010年（平成22年）からです。

Q. 消防士になられたきっかけは？

A. 友人の消防職員が、「消防」という業務に対して誇りと信念を持って取り組んでいる姿に感動し、いつしか自分も消防士になりたいと思うようになりました。

臼井さんと同期の女性が北消防署長浦出張所に勤務されていると伺ったので、職場にお邪魔してきました。

女性消防士の方にインタビュー

北消防署 長浦出張所 救急隊隊員
山田ひかるさん

Q. お仕事はいつから？

A. 2010年（平成22年）からです。

Q. 消防士になられたきっかけは？

A. 小学生の時に祖母を亡くしたのですが、倒れてから早く発見し処置ができていれば助かったかもしれないという話を聞き、「自分に何かできることがあったのではないか」と感じました。この時に将来はこの思いを生かし、たくさんの人を救える職業に就きたいと思い、消防士を目指しました。

Q. 苦労話がありますか？

A. 消防は体力を必要とされる場面も多く、比較的小柄な私は、傷病者を搬送する際に苦労を感じています。また、経験が浅く未熟な面も多いことから、先輩方に助けられることも少なくないため、今後さらに沢山の経験を積み、勉強をすることで、より信頼される消防士になりたいと思います。

ダイヤル 119 を回す時の心得

- ① 火事か救急か
- ② 住所、目印 (携帯電話のときは必ず)
- ③ 事故か病気が
- ④ 疾病者の人数、性別、年齢
- ⑤ 疾病者の状態、状況
- ⑥ 連絡者の氏名、電話番号

あわてずにお知らせを

今回は、女性の多い職場で活躍する男性の看護師さんをご紹介します。

中央消防署の臼井さんの上司である友松豊さんにもお話を伺いました。

Q. 初めて女性職員と接した時はいかがでしたか？

A. 男性一色の職場でしたので、女性に対し、話し方一つにしても気を遣いました。

Q. 来庁者の反応はいかがでしたか？

A. 最初は驚いた方もいらっしゃいましたが、職場が明るくなったとの声もありました。

男女共同参画も教える

家庭科の先生にインタビュー！



1994年度の学習指導要領の改訂で、高校では女子のみが必修だった家庭科が、男女ともに必修になりました。家族・家庭の役割や職業労働と家事分担、性別役割分業などが取り上げられています。「社会でも家庭でも男女の協力は不可欠で、男も家事や育児に無関心ではいけない」という風潮が強まり、それが発展する形で現在の「男女共同参画」につながったようです。

「男女共同参画」という言葉そのものは、現行の学習指導要領がスタートした2003年度の教科書から掲載されはじめました。

最近は、生徒会長や委員長を務める女子も増えていきます。中学校でも男女共同参画を学び、教育の現場では「男だから女だから」という性による役割分担をしないので、生徒たちは『男女共同は当たり前』と捉えているようです。

しかしまだ進んでいない部分はあるので、社会に出るから不平等さや理不尽な思いをすることもあてましょう。その時に「おかしい」と気づき、声を上げる人になってほしいです。

学習はしていても、身近なモデルである両親は、父が働き母は専業主婦という人が多いので、自分も将来は「男は仕事、女は家庭」となんとなく思っている人もいのではないのでしょうか。自分でそう決めるなら良いと思いますが、『習慣だから』『そう言われたから』という決め方はしてほしくない。人として自立してほしいと思います。

男女共に学ぶようになったからこそ、家庭科が重要な科目になってきました。世界の動きを知り、人が生きていくことがどういうことなのか、考えていけたらと思います。

お忙しい中、快く引き受けてくださりありがとうございました。

男女別々の授業はなく体育も基本は一緒。マラソンも同じ距離を走っています!!!

Q. 男性の家庭科の先生はいらっしゃるんですか？

A. 県立高等学校では4人います(非常勤・私立は数名)

ある男性教諭は、家庭の事情で家事や弟妹の世話を担っていたので、家庭科教員になることに抵抗がなかったようです。最初は珍しがられ、風当たりも強かったようですが、男性からの見方ができるので生徒にとって良い面があるようです。

教科書も変わりました！

- 写真、イラストが変わった(母子だったものが、家族や父子に)
- ライフステージを考える単元で、昔は歳上の男性と年下の女性(母子だったものが、家族や父子に)が結婚するようなモデルケースが載っていた。今は男女分けずに「パートナーと結婚」という言葉に置き換えられ、「結婚出産を機に退職」という表記もなくなった
- 調理実習の献立は、女性が家族のために作るメニューだったのが、一人暮らしで作れるものになった